Case 03

長崎県
福江島・久賀島ほか

レポート

森を整え、島の未来をつくる

Mitake合同会社代表
橋本 賢太

■五島で目指す林業の新しいかたち

長崎県五島市岐宿町出身の大戸誠一郎さんは、一度島を離れたのち、二〇一七年に五島へ戻り、現在は株式会社仙林の代表として林業に携わってきました。特殊伐採などの現場業務を通じて収益基盤を築きながら、森林整備や森林由来のカーボンクレジット創出にも取り組み、島の森に新たな価値の流れを生み出そうとしています。

「林業」と聞くと、山で木を伐る仕事という印象を持つ人が多いかもしれません。しかし、大戸さんが見つめているのは、単なる木材生産ではありません。森を整えることが、やがて川や海につながり、人の暮らしや地域経済にも影響していく。そうした大きな循環のなかで、五島の林業を成り立たせたいという思いが、その活動の根底にあります。

五島にUターンした大戸誠一郎さん。

■島を離れるのが当たり前だった世代

大戸さんは岐宿町の山内地区で育ち、岐宿中学校、五島高校へ進学。高校卒業後は島を離れ、愛知県で暮らしながら、さまざまな仕事を経験しました。営業の仕事に就くことが多く、最終的には外装リフォーム関係の営業にも携わっていたといいます。

当時の大戸さんにとって「島を出る」ことは特別な決断ではなかったそうです。自分たちの世代では、高校を

卒業したらほとんどの人が島外へ出るのが当たり前であり、島に残るという選択肢は、そもそも身近ではなかったと振り返ります。

■偶然のUターンが人生の転機に

そんな大戸さんが五島に戻ることになったきっかけは、強い決意に基づくというより、もっと偶然に依るものでした。もともと旅に出たいという気持ちがあり、一度五島に帰ってきたあと、西日本をヒッチハイクで巡る旅に出たそうです。長崎市内から九州を回り、船で四国へ渡り、中国地方や関西方面まで足を延ばして、約一カ月かけて各地を歩きました。

そうした時間を経て五島に戻ってきたタイミングで、祖父の体調が悪くなり、今後、通院のための送り迎えが必要になることが分かりました。

「小さいころ、祖父に送り迎えをしてもらっていました。だから今度は自分が残ろうと思ったんです」

大戸さんは、そうした思いから島に残ることを決めました。

■海を守りたい思いが山へ向かわせた

島に戻って、すぐに林業へ進んだわけではありません。カメラマンの仕事に携わったり、同級生が立ち上げた会社を手伝ったりしながら、自分に合う働き方を模索していたそうです。そうしたなかで出合ったのが林業でした。二〇一八年四月、二八歳のときに五島森林組合に入り、現場職員として四年間働くことになります。

もともと大戸さんは海が好きで、五島の美しい海を守りたいという思いを持っていました。その思いをたどっていくなかで、海の環境は山と深くつながっていることに気づきます。森、川、海はひと続きであり、山の状態が海の豊かさにも影響していく。その感覚が、大戸さんが林業へ向かう原点になりました。

■森には価値があるのに経済が成り立たない

現場で目の当たりにしたのは、森を守る仕事の重要さと同時に、その厳しい現実でした。日本の人工林の多くは、戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、将来の木材需要を見込んで大量に植えられたものです。スギやヒノキが密に植えられ、成長に合わせて本来なら五年から一〇年ごとに間伐を行ない、健全な森へ育てていく必要があります。しかし実際には、木を伐って売っても十分な利益が出ないため、必要な手入れがされないまま放置されている山が少なくありません。五島でも同じ状況

が起きていました。

森林組合の仕事は、委託された山の整備や管理です。混み合って育ちにくくなった木々を間引き、必要に応じて搬出し、木材として活用します。しかし、五島では木材を出荷するだけでも輸送コストがかかり、本土のように市場へ持ち込めばすぐに現金化できるような環境ではありません。島内には大きな木材市場もなく、乾燥施設やプレカット工場もありません。仮に五島の木を五島で使おうとしても、一度本土へ運んで乾燥や加工を行ない、再び島へ戻さなければならず、費用が大きく膨らんでしまいます。結果として、島の木を島の暮らしに生かしたくても、それが容易にできない構造があるのです。

大戸さんは、この現実に直面するなかで強い違和感を抱くようになりました。森には確かに価値がある。それなのに、その価値が経済の仕組みのなかで十分に生かされていない。山は放置され、整備に必要な仕事も続きにくい。しかも離島では、その不利がより大きく表れる。大戸さんは、林業の世界に入ったことで初めて、五島の山が抱えている問題の大きさを知ったといいます。そして、それは同時に「この課題を知ってしまった自分が、ここで向き合わなければならないのではないか」という意識にもつながっていきました。

■自分のやり方で山と向き合うために独立

すぐに独立を決められたわけではありません。森林組合を辞めたあとも、五島開拓集団という島内の会社で経験を積みながら、自分の事業として何をやっていくべきかを二、三年かけて考え続けたそうです。その間には、本土の林業会社や森林組合の人にも相談しました。多くの人は応援してくれた一方で、経営の面では本土でも厳しいのに、離島ではなおさら厳しい、と現実的な助言も受けました。周囲からの反対もあったといいます。それでも大戸さんのなかでは、次第に島で林業に取り組む覚悟が固まっていきました。

「五島でこの課題に本気で向き合えるのは、自分しかいない」。そう思えたことが、最終的な決断につながり、二〇二五年に株式会社杣林を立ち上げます。

■特殊伐採を柱に事業の土台を築く

現在の事業の柱の一つは、特殊伐採です。これは、住宅地や神社、道路沿いなど、通常の伐倒が難しい場所で、作業者が木に登り、上部から少しずつ安全に切り下ろしていく、高度な技術を要する仕事です。一般の人には難しく、危険も伴うため、専門的な知識と経験が必要にな

ります。個人宅や建築関係者、町内会などから依頼を受け、一本ずつ丁寧に対応していくこの事業は、会社としての大切な現金収入源にもなっています。

■久賀島で始まったカーボンクレジットの挑戦

足元の仕事をきちんと成り立たせながら、その先にある森林整備や地域の仕組みづくりにつなげていく。その姿勢に、大戸さんの堅実さが表れています。

大戸さんが見据えているのは、特殊伐採だけではありません。その先にあるのが、森林整備を軸にした地域の仕組みづくりです。特に現在力を入れているのが、久賀島の市有林約八一五ヘクタールを舞台にした森林由来のカーボンクレジット創出事業です。二〇二五年一一月には、五島市と民間事業者らで構成するコンソーシアムとの間で連携協定が締結され、行政と民間が連携してプロジェクトを進める体制が整いました。

カーボンクレジットとは、森林が吸収・固定する二酸化炭素（CO_2）の量を計測し、その環境価値をクレジットとして認証・販売する仕組みです。企業はそのクレジットを購入することで、自社だけでは削減しきれないCO_2排出分を相殺し、脱炭素への取り組みとして活用することができます。大戸さんたちは、ヤマハ発動機の無人ヘリによる森林レーザ計測なども活用しながら、森に何本の木があり、どれくらいの大きさで、どれだけのCO_2を吸収しているのかをデータとして

高所で行なわれる特殊伐採の様子。

久賀島で実施した無人ヘリによる森林レーザ計測。

把握しようとしています。

■数字だけでは測れない森の価値

ただ、大戸さんがこの事業で大切にしているのは、単にCO_2の数値だけではありません。森の価値はそれだけでは測れないと考えているからです。生物多様性、地域との関係、島の自然景観、将来の木材利用の可能性、さらには人が森に関わる意味までも含めて、森の価値を一体として捉えたいといいます。

合理性や数字だけでは森は守れない。だからこそ、意味や関係性も含めた価値化が必要だというのです。この考え方は、木材を生産するだけの林業ではなく、森全体を未来へつなぐための林業を目指す大戸さんらしい視点だといえます。

■「価値がない」のではなく「流れがない」

大戸さんは、離島の課題を「価値がないこと」ではなく、「価値の流れがないこと」だと捉えています。島には豊かな自然があり、森も海も資源としての可能性を持っています。けれども、それが地域のなかで経済や仕事として循環する仕組みが十分ではありません。

カーボンクレジットは、そうした循環をつくるための一つの手段です。島外から資金を呼び込み、その収益を森林整備に回し、やがて木材利用や地域還元にもつなげていく。クレジットは目的ではなく、森と地域を持続的につなぐためのツールなのです。

■島の木を島で使う仕組みをつくりたい

さらに大戸さんは、将来的な課題として、木材の乾燥施設の必要性も挙げています。もし五島に適切な乾燥設備が整えば、島で伐った木を島で使う道が大きく開けます。たとえば空き家改修や新築、地域施設の整備などに、五島の木をもっと生かせるようになるかもしれません。

当時の人たちが子や孫の世代のために植えてくれた木を、今を生きる自分たちが本来の目的に沿って生かしていく。それもまた、林業に向き合う者の責任だと大戸さんは考えています。島の木が島のなかで循環するようになれば、環境面だけでなく、地域の産業や暮らしにも新しい厚みが生まれていくはずです。

■次世代に選択肢を残すために

森林整備の成果が見えるまでには、一〇年、二〇年では足りず、五〇年、六〇年という時間がかかることもあります。今の選択が正しかったかどうかを判断するのは、

次の世代、あるいはさらにその先の世代かもしれません。

それでも大戸さんは、だからこそ挑戦する意味があると語ります。次世代にどんな森を残すのか。スギやヒノキばかりの単調な森を渡すのか、それとも本来の植生や生物多様性を取り戻せる可能性を残すのか。選択肢そのものを未来へ手渡すことが、今の自分たちの役割なのではないか、と考えています。

五島開拓集団時代には伐倒体験のガイドを務めた。

■ 山から海へ、島の暮らし全体を支える仕事

山は山だけで完結しません。山の状態は川を通じて里へ、さらに海へと影響します。五島の豊かな海も、山と切り離しては考えられません。大戸さんが林業に入った原点にも、「海を守りたい」という思いがありました。その意味で、大戸さんの仕事は、森のためだけの仕事ではなく、島の暮らし全体を支える仕事でもあります。

「島に戻りたい人は、みんな戻ってきたら良いのにと思っています」

そう語る大戸さんの言葉には、島で暮らすことへの実感がにじみます。島には不利な条件もありますが、顔の見えるつながりがあり、困ったときに相談できる人がいる。その近さは、都市では得難いものです。

■ 森から五島の未来を育てていく

森を整え、価値を可視化し、島のなかに仕事と循環をつくる。大戸誠一郎さんの挑戦は、単なる起業の話ではありません。五島という島で、人が残り、戻り、次の世代へ受け渡していける理由を、林業という仕事を通して形にしようとする試みです。

山から海へ、自然から暮らしへ、島内から島外へ。さまざまなものをつなぎながら、大戸さんは今日も、五島の未来を森から育てています。

橋本賢太（はしもとけんた）
一九八七年福江島生まれ。大学進学を機に島を離れる。一年間の海外生活を経てUターン、二〇一三年にGOTOパソコン専門店を開業。一八年にMitake合同会社として法人化、代表に就任。ゲストハウスとシェアオフィス、コワーキングスペースを運営。フリーペーパー「fullyGOTO」の二代目編集長も兼任。